



世界の妊産婦と女性を守る

東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害

経験共有会

2019年11月23日 / えひめ共済会館

母子を支える専門家とママ、
私たちが感じ、気付いたことを
これからにつなげるために。



ジョイセフは、地震や津波、豪雨など大規模な災害が発生した時に、
支援のニーズが見落とされがちな女性と母子を対象に、
国内外で支援活動に取り組んでいます。



経験共有会 目次

第1部 保健師・助産師による経験共有 P3

災害発生後の母子支援活動およびそのなかで感じた課題や対応について

第2部 ママグループによる経験共有 P8

災害を経験したママたちは何を思い、活動へと変えていったのでしょうか

グループワーク 災害に備えた対応と他地域の母子支援専門家／ママたちに共有したいこと P10

VOICE	P13
コラム	P14
経験共有会参加者一覧	P15

第1部

保健師・助産師による経験共有

災害発生後の母子支援活動および
そのなかで感じた課題や対応について



情報を共有することが
災害へ対応する力になり、
減災につながる。

被災した人が早く日常に戻れるための、継続支援を

私たちは発災2カ月後の2011年5月11日から、電話相談を実施していました。そこで聞いたのは、現金が底を尽きました、と涙ながらに訴えるママたちの声。それが気になっていて、その後ジョイセフから支援の希望を聞かれた際に「妊婦さんたちに現金を」と言ってしまいました。これがのちに「ケショ※」となり、多くの妊産婦や子どもが喜んだと思います。電話相談では、ほかにも本当にいろいろな問題が出ました。その多くは古い家父長制度や固定的性別役割分業意識から来ているようにも感じました。また、ほしいものの要望は1週間単位で変化していく。そこへの対応もとても難しいものでした。災害は日常を奪います。その状況を改善することが、被災地の力につながります。力がついていない時に支援が届いても、そこに心も身体も追いつかない。だからこそ「早く日常に戻す」ための支援の継続が必要だと感じています。



*ケショ=出産した産婦さんにジョイセフが直接支給した支援金。「ケショ」はスワヒリ語で「あした」を意味します。

心のケアを中心に、健康で安心して暮らせるまちを目指す



震災後の乳幼児健診に際して「心の問診票」を使いました。そこで見えてきた“ママが高ストレス状態だった”ことを受け、ジョイセフの支援で「リフレッシュ・ママクラス※」を2017年度まで開催しました。その時に誕生したママたちによる8つのグループは現在も活動していて、継続的な交流などにつながっています。

南相馬市の震災後は原発事故に伴う放射線の問題がどうしても関わってきます。原子力発電所近郊の市町村では、放射線の基本的知識が学べる場が必要だと痛感しています。また、平常時からの地区活動が震災時の支援活動に役立ったことも覚えておきたいことです。まちは落ち着きを取り戻していますが、避難は未だに続き、復興途上です。健康で安心して暮らせるまちづくりを目指したいと思います。

*リフレッシュ・ママクラス=乳幼児を持つ被災した母親たちが「生きる力」、「育てる力」を取り戻すことを支援するプログラム。自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門、公益社団法人母子保健推進会議、被災地の各自治体等と連携して実施。



宮城県

宮城県助産師会会长 後藤美子さん

被災母子支援事業を通して 学んだことを防災マニュアルに

発災直後、当助産師会にはまだ災害対応マニュアルがありませんでした。そのなかでも事務所のライフラインが復旧した被災3日後から、会員の安否確認と母子の電話相談、乳幼児の入浴サービス、また、宮城県内の母子を対象に産後の母子預かり事業も実施。2ヵ月後には母子支援事業を具体的に開始しました。これらの経験をもとに生まれたのが防災マニュアルですが、その後仙台市との助産師派遣協定や北海道・東北地区と災害時に助産師会間で助け合える協定を締結したこともあり、現在内容を見直しています。加えて、じょさんしサロンや妊産婦の相談事業などを現在も継続しています。



熊本県

熊本県助産師会会长 坂梨京子さん

開業助産師を多地域に 配置して、行政との連携を

熊本地震では助産師会所属の助産師がのべ375施設の避難所訪問を行いました。所属助産師70名のうち50名は熊本市内に住んでいます。つまり熊本市以外では非常に数が少ないので、開業助産師がいる地域では母子支援ができますが、いない地域では、病院勤務の助産師や行政に頼るしかありませんでした。とはいっても、病院勤務の助産師は、1ヵ月健診までしか母子を診ることができない。ですからそのような地域にも助産師を配置し、助産師と助産師会が行政と連携できる体制をつくっていかなければなりません。

岡山県

岡山県助産師会会长 東森二三子さん

母子支援の情報発信に注力し 今後のフォローアップ体制も構築

岡山県助産師会による母子支援の情報を、助産師会ホームページに掲載するほか、行政と連携した情報発信、地元の新聞に掲載してもらうという方法を取りました。加えて避難所訪問の際には館内アナウンスも実施しました。しかしそもそもボランティアで活動できる助産師を募集していなかったため、災害後に募集し、現在は助産師32名が保険加入のうえ、いつでも動ける体制をつくりています。また、災害時における小児初期対応として倉敷市や小児科ドクターとも連携し、災害直後、1週間後というように時間軸での避難方法やそのフォローの発信にも務めています。



岩手県

釜石市保健福祉部健康推進課(兼)子育て包括支援センター 主任保健師 洞口祐子さん

万が一のために台帳は二重管理 出産直後のケアにも備えを

釜石市では保健センターの1階が浸水。建物は停電し、ボイラー室も何もかも使えない状況でした。復旧するまでの1週間はパソコンも使えませんでした。妊婦や乳幼児の管理票(個票)が流出したセンターもありました。しかし普段からパソコン内のデータだけではなく紙でも台帳を用意するという二重管理をしていたため、その台帳で、出産予定日の近い人から順に、安否確認が行えました。ほかにも、生まれた赤ちゃんがお風呂に入れない状況があったこと、離乳食の確保の問題も、今後も向け覚えておきたい部分です。



宮城県

宮城県助産師会 岩佐あけみさん



被災の種類に合わせ、 最適な支援方法を学びたい

震災直後、町ではどうしても命に関わる方に目が行きがちなのですが、母子は?と周りを見ると、産科病院がすべて閉鎖されていることがわかりました。いざ出産となったとき、そして母子の健康に何か起こったときに病院がない状況だったのです。そこでなんとかプリントできた台帳を持ち、母子が避難した地域を順に回って安否確認や支援を行いました。その後も台風被害などが出ていますが、被災の種類によって支援方法も違うはず。そこをこれから学んでいきたいですね。

宮城県

宮城県助産師会 本田由美さん

開業助産師は自らも辛いなか 震災時の母子支援をしてきた

石巻市の隣にある東松島市で母乳育児相談室を20年ほどやっています。震災前は1ヶ月で60~80人ほどが来ていましたが、震災後、最初の2ヶ月ほどはゼロでした。みなさんお金がなかったのです。訪問者がいらないということは、開業している助産師にとって死活問題です。そこで助成金を活用してママたちの費用をそこから捻出し、私の中の心細さが減っていました。また、ジョイセフの母乳育児支援もあったおかげで、生計を立て直せたと思います。



岡山県

岡山県助産師会 高岸純子さん

自分やスタッフが被災すると 地域のママに寄り添えない

今回は助産院だけでなく自宅もスタッフも被災したため、地域のママに寄り添う活動がまだ完全には再開できていません。現在は助産院2階で保健指導や母乳ケアを少しづつ行っていますが、離乳食教室やサロンの再開はまだ時間がかかりそうです。ジョイセフなど関係機関からの支援を受けながら、できることを続けています。



広島県

広島県助産会会長 吉田康子さん

初動の遅れと連携不足のない 体制の構築が必要

助産師会の助産院を無料宿泊所にしましたが、交通が分断されている状況で利用者がいませんでした。また災害後少し経ってから避難所を回りましたが、そこに母子の姿はありませんでした。この反省から、災害マニュアルを生かす仕組みづくりや行政との連携を進め、迅速に活動できる体制構築の必要性を感じています。

愛媛県

愛媛県宇和島市保険健康課課長補佐兼母子保健係長 岡本直子さん

母子安否確認の仕組みを 反省を生かして構築中

医療的支援が必要な方や高齢者など要支援者の安否確認を優先したため、行政による母子の安否確認が後回しになってしましました。そのような中で活躍していただけたのが、助産師の皆さんです。そこで現在、保健所が中心となり、産科医療機関の協力を仰ぎ、宇和島保健所管内における災害時の妊産婦の安否確認の仕組みを検討しています。



愛媛県

愛媛助産会会長 井伊貴子さん

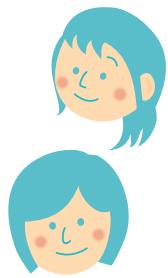
地域に根付いたグループと しっかり連携を取る必要がある

これまで大規模災害が比較的小なかった愛媛県では、やはり初動に遅れがあったことは否めません。そのような中で私たちよりも早く動いていただけたのが、地元で以前から活動していたママグループでした。地域に根付いて活動する団体との連携の必要性を痛感し、つながりづくりをしていかなければと考えています。

第2部

ママグループによる経験共有

災害を経験したママたちは何を思い、活動へと変えていったのでしょうか



福島県

ピアママ 小林こずえさん

経験したからこそ見えた課題。解決が必要です

私たちはジョイセフの「リフレッシュ・ママクラス」を通じて知り合ったママたちと立ち上げたサークルですが、ママたちと話すなかで、①子どもや家族よりも仕事を優先しなければならない状況がある、②ママたちの孤独感、③将来の出産に不安を覚えた、④今後の生活への不安、⑤災害への意識の低さ、⑥安否確認が困難、⑦情報格差という7つの課題が見えてきました。これらを解決するために①職場内での家庭状況を踏まえた体制づくり、②孤独を感じても自覚がなくても自然につながれる支援体制、③的確な情報提供、④生活拠点の確保、⑤平時からの備え、⑥連絡体制の確認、⑦自分たちで情報の真偽を見極める力の必要性を感じています。



宮城県

「ママのお茶時間」ママサークル 久保田華子さん

ジョイセフ・カレッジTOHOKUで前を向き、今があります



東日本大震災の前からサークルを立ち上げていて、当時はママがホッとできる場所づくりをメインで考えていました。しかし震災後、災害の記録を残そうとアルバムづくりをしました。

そのような中で「ケショ」を通じてジョイセフとつながり、「ジョイセフ・カレッジTOHOKU」に出会いました。そこで自分自身のケアが必要だと気づき、また、カレッジのなかでドリームプランを考えていく過程で前向きにもなれました。同じ時に参加したママたちと当時を振り返っても、あの時間が今につながっていると感じています。

現場で動いてくださった専門家のみなさんやジョイセフのおかげで、今があります。ママを応援する側になった現在、そしてこれからも、できることをコツコツと続けていきます。

熊本県

妊娠・出産・子育て情報ネットワーク うみ・つき 田代佳織さん

ママたちの声から、防災につながる新たな活動へ

私たちは、妊娠出産子育ての現場を変えるには当事者が変わらなければという考え方で、当事者目線の情報発信を行っています。熊本地震では前震・本震が共に夜発生したこともあり、今後も地震が来るのではないかと、家に入れなくなった子どもたちがいました。新学期スタート直後だったこともあり、子どもたちの精神的なダメージは大きかったようです。

そんななか、子育てサークルも休止、公共施設も休館で行き場がないママたちのために、熊本県助産師会の坂梨会長に相談し、母と子の癒し交流サロンをスタート。そこで得たママたちの声から、現在は熊本発祥のおんぶ紐もっここの利用をはじめ、普段も災害時も同じように暮らせるライフスタイルについて発信し、赤ちゃんとママをサポートしています。



広島県

子どもおたすけ隊 山本さなえさん

ママたちが話ができる「子育てひろば」が今後は必要



保育士として子育て支援に関わってきた経験を生かし、呉市で子どもの預かりと親子の交流の場を開設しました。災害後、関わっていた子育てひろばが一時閉鎖し、子育て中の母子の状況が把握できなくなりました。そこで地区の主任児童委員とニーズを聞いて回り、片付けしたいから子どもを預けたいというママのために、知り合いの保育士と2人でこの活動を立ち上げたのです。

参加してくれたママの声を聞いてわかったのは、ママたちが一番知りたかったのは「こんな時みんなどうしてる?」ということ。だからこそ今後災害が起った際には、「子育てひろば」が必要だと感じています。そこから支え合う環境も生まれてくるのではないかでしょうか。



グループ ワーク

災害に備えた対応と他地域の 専門家／ママたちに共有したいこと



共有会の第2部では、専門家とママグループに分かれてディスカッションを行いました。
専門家の皆さんは別々の地域で支援にあたっていたにもかかわらず、見えている未来への対策は同じ。
またママグループでも、同様の結果となりました。
本セッションで出てきたキーワードは、災害時における母子支援を今後実践していくうえで、
着目すべき部分であると言えます。



日常からのつながりを 築いておくことが大切

保健師・助産師の専門家グループは、「連携」を何よりも大切だと感じたそうです。災害時の母子支援では、何よりもママや子どもが安全・安心であるように、専門家は活動します。個々のスキルはもちろんですが、それを活かすためにも、専門家同士やママグループとのつながり、また地域の行政や医療機関、自治会、それに家族間や当事者と支援者といった多角的な連携体制をつくっておくことが、これから災害時の母子支援には欠かせない視点であるとのことでした。

そこで大切なのは、「つながりは、生きていくうえで一番コアになる部分である」という共通認識。それぞれの連携を強くしていけるようなつながり方を日常から模索しておくべきという声が多くあがりました。その中で日ごろからニーズを把握しておくこと、専門家として何ができるかをママに知っておいてもらうことなども重要です。そこでは発信力を専門家が高めていくこと、そのために今できていること、これからやろうとしていることの正確な把握も、3つの災害を通して見えた、今後のための大切なポイントでした。災害時の支援活動は、想像を超える気力、体力を必要とします。充実した母子支援のためには、専門家が自身のケアを忘れないことも大切です。



専門家の声

防災力を高めるように発信していく

助産師として何ができるかを日ごろから発信していくだけでなく、地域の防災力を高めることにつながる情報の発信も必要

災害時のネットワークづくり

助産師が地域の医療機関と連携できていれば、母子に万が一の事があったときも速やかに医療へつないでいける。密な関係構築を

地域力、家族力をつける

助産師や子育てサークルのつながりを活用して支援をはじめる、家族の持っている力を信じて、家族力を強くしていけるような支援を

地域のつながりを大切にする

連携が何より必要だが、そのためには地域のこと日ごろから知っていなければならない。知っていると専門知識を発揮できる

支援者への心のケアを忘れない

みんなが疲弊している中の支援は、支援者が自身のケアを忘れがち。セルフケアも含め、支援者の心を大事にしていかなければならない

命を守る行動を意識する

日常生活が防災につながっているという感覚を持っていないと、いざ被災したときに動けないのでないか。日常的な防災の意識が必要

地域、関係機関との連携

顔と顔が見えるつながりがあれば、災害時の母子支援でもっといろんなことができたはず。地域同士、専門家同士、町内会などとも連携を

＼ ほかにもこんな声があがりました ／

母子の安否確認の仕組みづくり

母親、女性の心を癒すサポート

情報収集の手助け

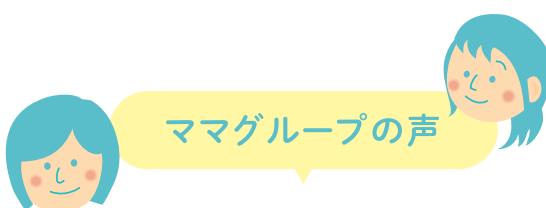
生きる力を育てる

将来の災害のために備えておくこと

ママグループでは、「自分たちは何に備えるべきか」が大きなテーマとなりました。重要なのは被災者自身が力を付けること。そのためには日ごろから、家族間の協力体制やママグループ内の連携はもちろん、どう生きるか、万が一の際にどう対応するかを考えておく必要があることが、みなさんの共通認識だったようです。連携ができていると、例えば避難所の状況やママ同士で助け合える情報などが多くママに伝わります。その際は、発信力の高いママの力を

借りてより多くの人に情報を伝えることも効果的だという意見がありました。情報が届けば、それが助けを求める力や、自分や家族を守る力につながっていくのです。そこでポイントとなるのは「やった方がいいと思ったらやってみること」。将来の災害のために役立つと思ったことを、ママ達が率先して動くことが、つながりの構築だけでなく、備えにもなります。

また、ママの間で保健師・助産師に聞きたいことリストを作成し、保健師・助産師は話したいことリストを作成しておくことが大切だとの声も。それをすり合わせるコーディネーターがいれば、双方のつながりがグッと深められ、災害時に孤立する母子を減らすことにもつながるのではないかでしょうか。



ママグループの声

自分たちにできることを考えておく

日常生活に何を取り入れておけば災害時に役立つか、必要なサポートは?と考えておけば、日々の生活が防災につながる

日ごろから、どう生きるかを考えておく

ママグループや家族の間で普段から防災について話をしておくと、協力体制がつくれるなど、話すことそのものが対策になっていく

自分たちがしてもらったことを次のママにつなげる

災害時に困ったことや受けた支援を情報として多くのママと共有できれば、先を見据えた備えにつながっていくはず

伝えること、知ること、行動すること

助産師など専門家の支援情報など、ママに役立つ情報を知ることは、子どもを守ることにつながる。情報収集ための行動を起こす

多世代が関わるきっかけづくり

楽しいことは幅広い年齢で共有していく場が重要。またおじいちゃん、おばあちゃんがいることのメリットを発信していくことも必要

やさしい好奇心

防災や連携の活動の中心に「やさしさ」を置くと、助け合いがもっとできるようになるし、自分にできることを考えるきっかけにもなる

助けを求める力

支援してもらっているからと遠慮するのではなく、我慢しないこと。ママ同士が助け合うためにも、困っていることがあれば声に出す

＼ ほかにもこんな声があがりました ／

地域で子育て世代とつながる

コミュニティを活用

ママが集まる場所に出て行く

役割を持つことで自己を肯定できる

VOICE

専門家とママが被災地での経験、そこで得た学びを共有した時間。
今後へつながる、参加者の思いをいくつかご紹介します。

行政だけでなく、民間も含め、いろいろな人とつながることの大切さをあらためて感じました。ディスカッションの中でのキーワードに、連携、つながり、命など専門家もママも同じようなワードが出ていました。仕事をしていくなかで関係機関との顔の見える関係づくりは必須だと感じていますが、何か起こった時につながれるような相手先を作つておくことが復興において大切なことだとあらためて感じました。普段から地域の中に入り、地域の力を引き出せる保健活動が求められていると思います。被災を機にグループ化され、それを現在も継続し、地域づくりにつなげている様子を見て、そういう人材を発掘していくことも地域づくりに必要と感じました。助産師会の活動を知り、助産師さんの力の大きさを痛感し、今後より一層連携を深めていきたいと感じました。

専門家とママたちを「つなぐ」ことが次の課題であると見えました。

ママのイベントに専門家を呼び、また専門家のイベントに「先輩ママ」を呼び合うなど、それぞれに補い合うことも大切だと感じています。また、助産師は「女性の一生をケアする」という衝撃の事実を知り、これまで赤ちゃん時期のケアのみと思っていたので、驚きました。他のママも同じ感覚だったので、ぜひ専門家に更年期ケアなどもろもろのアドバイスをいただきたいです！座談会形式もいいですね！私の発信した「ママ茶」も興味を持っていただき嬉しかったです。「やり方」はあるものの「どこでも」できるので、必要であれば体験会を各地で開いてもいいなあとアイデアがどんどん出てきています。同時に自分を発信できる「もの」（HP、FB、名刺等）もそろえなきゃなあといい刺激をいただきました。身内でほっこりやっていましたが、「支援者を支援する」という新たな目標ができたので、視点が変わりました。「自分の事務所兼スタジオが欲しいな」「どうやったらできるかな？」「企業にサポートもらえるかな」などなど、広がっていったらいいなあと新たな希望を持てました！

経験してきたことやママの立場での思い、支援者としての考え方や案、そして反省点まで伝えてください、多方面に渡り、学ぶことができました。今私が悩み、ぶつかっている壁を乗り越えるためのエッセンスがたくさんあり、希望となりました。励ましもたくさんいただきました。またこの新しいつながりも、これからの大切なつながりとなりそうな気がしています。そして、苦しんでいるママたちに少しでも助けになりたいと必死になって走ってきたので、自分がいっぱいいいっぱいで頑張っていた時間から離れるこのような時間は、発災後初めてでした。

「つながり」と言葉では言うけれど、実際にそのことを実現できる集まりって、本当に少ない。でも、この集まりは、それを実現してしまう、すごいプログラムだったと思います。共有会そのものにも、短い時間の中に内容が凝縮するような工夫が随所にちりばめられていましたが、本当につながりを深められたのは、食事や温泉や一緒にめぐった観光地でした。これは、ジョイセフスタッフの人柄にふれる機会にもなりました。また、誰か（ジョイセフなど）に大切にしてもらった、この体験こそ、シンプルにこれらの原動力になることを実感しました。ジョイセフの皆さんには、感謝しかありません。早速、石巻のママたちと共有会で出逢ったママをつなぎます。大きな事業をしていくためには、専門職だけでは限界。男性の力、企業の力、ママたちの力、みんなの力を合わせていく必要がある。コーディネーター、すごく大事です。



コラム

これからの母子支援には、 男性の目線とアイデアも必要



災害時の母子支援では、男性の目線・協力がこれからは重要になってきます。
共有会では災害支援に関わった2人の男性が登壇し、その必要性に触れました

パパフレンド協会 北佳弘さん

母親のための時間創造が 環境理解や防災教育へ

パパフレンド協会は、父子で遊べる場の提供を通して母親の時間をつくるための支援をしています。西日本豪雨災害により、広島県では河川の氾濫による浸水や土砂崩れが相次ぎ、公園や空き地はがれきや土砂の仮置き場となりました。そのため子どもが安全に遊べる場がないという声を聞き、安心して子どもが遊べてストレスを発散できる、室内の遊び場を提供。男性も関わりやすい内容にしたことで父親の参加が増え、父子が遊んでいる間に母親同士が情報交換をする姿も多く見られました。会は計6回の開催で親子4000人が参加。災害で中止した発表会の代わりに習い事など成果を発表する場を設け、子どもの自尊心を高める機会にもつなげました。また、広島県で土砂災害が多発したのは人工林の放置も一因でした。そこで、積み木など県産木材のおもちゃを使って木に触れ親しむ場を提供。森林環境に関心を持ち、その多面的機能の理解から防災につなげる働きかけもしています。



株式会社glass 橋本勲さん

企業や団体とも日ごろから 積極的につながっておく

東日本大震災の半年後、資生堂ジャパン近畿支社と「with0311プロジェクト」を立ち上げ、企業の支援とジョイセフをつなぎました。災害時の母子支援では、ピンポイントな支援を必要とする場面が多く見受けられます。そのようなケースに、公的支援はなかなか手が届きません。そこで活用してほしいのが、企業や団体など、民間の力です。例えば東日本大震災では、ある県の助産師会が化粧品メーカーに現状を伝え、多くの物資を送ってもらえた例がありました。一方で企業や団体側には、支援をしたくても何をしたらいいのか分からず、という声も多くあります。だからこそ、活動に企業や団体の人を巻き込んでいくことを、将来の災害に備えるひとつ的方法として考えていただきたいと思います。すると万が一の時、それがきっかけとなり必要な支援を受けられる可能性も高くなります。また、企業や団体とのつながりがなくても、「つながりを持っている人とつながる」ととも、同様の効果があると考えられます。自分たちの声を聞き、運んでくれる人の関係構築へ、ぜひ積極的に動いてください。



東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害 経験共有会参加者一覧

(順不同・敬称略)

氏名	都道府県	所属
田端 八重子	岩手県	一般社団法人GEN・J 代表理事
洞口 祐子	岩手県	岩手県釜石市保健福祉部健康推進課(兼)子育て包括支援センター 主任保健師
大石 万里子	福島県	福島県南相馬市健康福祉部健康づくり課課長
後藤 美子	宮城県	宮城県助産師会会长
岩佐 あけみ	宮城県	宮城県助産師会
本田 由美	宮城県	宮城県助産師会
坂梨 京子	熊本県	熊本県助産師会会长
東森 二三子	岡山県	岡山県助産師会会长
高岸 純子	岡山県	岡山県助産師会
吉田 康子	広島県	広島県助産師会会长
岡本 直子	愛媛県	愛媛県宇和島市保険健康課課長補佐兼母子保健係長
井伊 貴子	愛媛県	愛媛助産師会会长
松下 千恵	愛媛県	愛媛助産師会
原田 恵美	愛媛県	愛媛助産師会
小河 祐美	福島県	南相馬市ママグループ「ピアママ」代表
木下 美奈子	福島県	南相馬市ママグループ「ピアママ」
小林 こずえ	福島県	南相馬市ママグループ「ピアママ」
久保田 華子	宮城県	宮城県ママグループ「ママのお茶時間」ママサークル
田代 佳織	熊本県	熊本市母子支援団体「妊娠・出産・子育て情報ネットワーク うみ・つき」代表
今村 理香	熊本県	熊本市母子支援団体「妊娠・出産・子育て情報ネットワーク うみ・つき」
石原 宣恵	岡山県	岡山県災害支援団体「いのりんジャパン」母子支援部
見附 歩美	岡山県	岡山県災害時母子支援団体「サンサポートオカヤマ」
山本 さなえ	広島県	吳市母子支援団体「子どもおたすけ隊」代表
割方 邙花	広島県	吳市母子支援団体「安浦こどもひろば たけちまる」代表
竹内 よし子	愛媛県	えひめグローバルネットワーク代表理事
北 佳弘	広島県	一般社団法人パパフレンド協会代表
橋本 熱	大阪府	株式会社glass
小野 美智代	東京都	ジョイセフ
佐藤 幸子	東京都	ジョイセフ
横井 ナナ	東京都	ジョイセフ
柚山 訓	東京都	ジョイセフ

経験を糧に。



経験共有会の学びを 将来につなげる

公益財団法人ジョイセフ
市民社会連携グループ／シニア・プログラム・オフィサー 柚山 訓

東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害の被災地で女性と母子を支える活動に取り組んできた方々からの経験共有により、今後災害が起きた時に、支援活動に加えてジョイセフがさらに何をすべきかについて考える貴重な機会をいただきました。

ジョイセフがすべきことのひとつ目は、母子を支える人のケア。災害時に母子支援に携わる保健師や助産師などの専門家、ママグループの心のケアのためにできることをさらに考えていきたいと思います。ふたつ目は、家族のケアや生活再建における女性の負担を軽減するための男性の巻き込み。そして、三つ目として、企業と連携した支援の取り組みを広げていくこと。ここで得られた気づきや学びを財産とし、広く関係者に共有し防災・減災に役立てていくとともに、ジョイセフの果たすべき役割をしっかりと努めてまいります。

知恵や経験を最大限活用し、 災害に備えるために

公益財団法人ジョイセフ 代表理事 石井澄江



※写真右端が石井

ジョイセフがその活動の歴史上、初めての国内支援を実施したのは2011年の東日本大震災がきっかけでした。東日本、熊本、西日本と支援を継続しながら次の被害が出ないようにと祈る役職員の願いもむなしく、災害は後を絶たず、激甚化の一途を辿っています。

私たちの住む東南アジア地域は最も自然災害の激しい地域として知られています。そこで生まれ、暮らししていく私たちは、その厳しい環境に負けないよう、持っている知恵や経験を最大限活用し、今後も起こるかも知れない災害に備える必要があります。

女性と母子を支え続けてきた皆さまの貴重な体験を多くの方々に知っていただくためにこの記録をまとめました。この冊子を使って、是非周りの方とお話をしてください。ご自分の経験も含めて。

経験共有会に参加いただき、惜しみなく体験を共有してくださった皆さんと、この企画を実施するにあたり、ご協力くださいました関係者の皆さんに心からの感謝を申し上げます。

経験共有会および報告に関するお問合せ

ジョイセフ被災者支援担当 info@joicfp.or.jp

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-10 保健会館新館

公益財団法人ジョイセフ

TEL:03-3268-5875 FAX:03-3235-9774